

三角印の青春の行方

リディフラック・ウォレイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊馬百汰、芹澤悠吏、不破溪士の恋の青春を描いた二次創作。

シナリオが3つに分けられて進んでいく。

太陽編 遊馬百汰

不破におかしな感情を抱いてしまったのが始まりとなり、不破に告白しようとするところへ事故で芹澤と口づけをしまい、不破と芹澤、どちらを選ぶかで思い悩む日々が描かれている。

空編 芹澤悠吏

事故で不破と口づけを交わしてしまったこと、事故で遊馬と口づけを交わしてしまったことで、思いもよらぬ展開へと変わってしまう。

遊馬と不破の関係を知り、毎日二人の幸せか自分の幸せかという狭間に葛藤をし続ける日々が描かれている。

月編 不破溪士

遊馬への行為から始まり、事故で芹澤と交わしてしまったあの日、境に一体どちらに愛を注ぐのか。どちらを切り落とさねばならないのか。たった一問の選択肢に答えを迫られる日々が描かれている。

目次

太陽編

第一話

1

月編

第一話

4

空編

第一話

7

太陽編

第一話

俺の今までみんなと変わらない青春が禁断の青春に変わる。

これは二年生の冬休みが終わり、三学期が始まった頃だった。

俺は遊馬百汰。

俺はその日のホームルームを終え、荷物の整理をしていると、「おい、ももー！」と声のするほうを見ると、巽、アラン、竜之介がいた。俺は支度を終え、颯爽と駆け出した。俺たちは、昇降口へと向かいながら話をしていた。

瀬名「今日はこれからどうしようか？」

皇「そうデスネ：。」

昇降口へとたどり着き、俺が外靴をとると、巽からこんな質問が。

東雲「つとつかお前ら課題終わったのか？」

皇「もちろんデス。」

遊馬「なんとか全部終わったけど、危なかったー！」

と、竜之介が何故か外へとスタスタと忍び歩きをしていた。

それを見てさすがの俺たちも……。

東雲「全くお前は……。」

遊馬「もしかして全部って言うんじや？」

瀬名「そんな滅相もない!!」

皇「じゃあなぜ？」

竜之介はアランの質問を無視して慌てて答えた。

瀬名「そりやあ、国語もだしでしょ？社会もだしでしょ？そして理科も……。」

て理科も……。」

??「ならなぜ先生のところには来ないのかな？」

瀬名の後ろになんと真山先生の姿が目映った。

その顔は果てしない地獄を感じさせる表情だった。

竜之介は思わず慌てている。

瀬名「あつ先生！ああははは……あれ、おかしいなー？ちやんと

しつかり全部だしたよー?… 数学以外…」

遊馬&東雲&皇「!!ブルブル」

数学以外と聞き俺たちも背筋が震えた。

ある意味先生も竜之介も怖いとそう思った時だった。

真山「… 上等! ショータイムだ! こちらへ参れ!!」

と先生は竜之介の襟を掴み、職員室へと引つ張っていった。

瀬名「あれれ? あははははははは、また明日ー!」

俺たち「…」

東雲「… 今日はそのまま帰るか…」

皇「そうデスネ。」

二人は当然残念そうな顔だった。

俺はふと何かに気がついた。

遊馬「あつ! 俺忘れ物があった。今日はこれで!」

東雲「ああ。」

皇「また明日デス。」

俺は二人に別れを告げ、自分の教室まで戻ってきた。

遊馬「えーとどこにあつたつけ?… あつあつた!! 急いで帰るか。」

俺はノートを鞆にいれ、急いで向きを変えると急に誰かと転んでしまった。

遊馬「いったた、大丈夫… 不破?」

そこには一緒に転んだ不破の姿があった。

不破「…!」

遊馬「…! ごめん!!」

俺は不破を覆い被さった状態だった。

なのでこの状態を理解すると、すぐにどく。

けれど俺はなぜか熱い。今冬真っ盛りなのに。

コレが初めてじゃない。不破を見るたびに胸が苦しくなる。なんだこれ?と考えていると、

不破「こちらこそすまない。あまりに近すぎたな… よかったらどこかに食事でもいかないか? なーんて…」

遊馬「いいよ。」

不破「へ？」

とつさに答えてしまったが、竜之介は先生からお仕置き受けてるし、二人も先にかえってしまっただし、それに他の誰かと一緒に行くというのも新鮮な感じがした。俺は不破と一緒にカフェに向かった。

不破とは話が合うような合わないような。

そんな微妙な雰囲気でもカフェについて。

遊馬「ここ凄いなー、カフェテラスの周りは花とかばかり…。」

不破「ああ、ここは西園寺と面識のある神風家が受け持つてる店なんだ。」

遊馬「嘘！これはすごい！」

と話し合いながら席についた。

遊馬「不破の弓は本当にすごいよね！前にどこかの大会で不破の競技を見たけど全部まともに当たってるよね。」

不破「ありがとう。だが、今は何故か当たらないのだ…。」

いけないことを聞いただろうか。俺はすぐに話を変えた。

遊馬「不破って家族は何人ぐらいなんだ？」

不破「俺を含んで9人家族だ。両親と祖父母…そして四人の姉…俺はとても幸せだが、姉たちからの扱われかたには本当に叶わん。」

遊馬「そ…そうなのか…。」

またもや、しかし不破はとても嬉しそうな表情をしていた。そして、あつという間に時間が来てしまう。

遊馬「もうこんな時間。今日はありがとうな。俺そろそろ…。」

不破「待て！」

遊馬「…!!」

不破は強い声とたくましい手で俺を引き留めた。

そして、俺は気づいてしまった。これはこうゆう感情だと…。

遊馬「どっとうしたの？」

不破「…頼む、聞いてくれ。俺は…。」

続く

月編 第一話

俺はすぐに、後悔したあの頃の出来事から。

俺は：

遊馬が好きだ。

そう気づいて2ヶ月：

二年の冬休みが終わり、皆授業に集中していた。

対して俺は、考え事ばかりでちつとも鉛筆が動かない。

先生「不破、聞いているか？」

不破「は、はい。すみません。」

先生「不破が聞いてないのは珍しいな。この問題わかるか？」

不破「えーと…。」

不破（なぜこんなに自分は不甲斐ない。前はもつとまじだつたはずだ。）

それに前よりずっと遊馬のことを考えている。

と、1つ右側で一番前の席にいる遊馬をみた。

そして、決意した。あまり話す方ではないが告白しようと、ただま
ずは親友として付き合おうという心構えをする。

ホームルームが終わり、俺は部活がないが俺は決意を強くするため
自身の稽古として弓道場へと向かう。

不破（あつ、ノートを忘れてきたかもしれん…。）

そして不破は再び教室へと戻っていった。

教室へとたどり着き、中へはいると遊馬がいた。

不破「…：／＼」

遊馬は机の中を探しているようだ。

手伝おうとして遊馬に近寄ると… 突然遊馬が急に向きを変えて、

俺とぶつかってしまった。

遊馬「いたた、大丈夫?…!!」

不破「…!!」

気づけば遊馬が俺を覆い被さった形になっていた。

俺は、遊馬の顔を見て頬を赤くしてしまった。

一瞬静かにこちらを見る遊馬だったが、すぐに慌てて退いてくれた。

遊馬「ごつごめん!!」

不破「こちらこそすまない。… よければ一緒に食事でも… なんてな。」

つい咄嗟にいつてしまったことだったが、遊馬と一緒に時間を作りたいという無意識な行動だった。けれどまずは断られるだろうと、そう思った。

すると、遊馬がこう答えた。

遊馬「いいよ。」

不破「へ?」

遊馬のまさかの答えに俺は予想だにしなかった。

遊馬とは知り合っているといっても共に娯楽をすることなど一度もなかったし、俺から声をかけることは今までしなかった。なので怪しまれて断られると思ったのだ。

しかし、了解をもらいとてもよい気持ちだった。

コレが嬉しいというものだろうか?

俺は色々思いながらも遊馬と共に西園寺と知り合いの神凧家が所有している喫茶店に向かった。

遊馬とは話が合うか合わないか。

そんな微妙な感じで喫茶店について。

遊馬「…すごい、カフェテラスの周りには花とかばかり。」

不破「ここは、西園寺と面識ある神凧家が受け持っている店なんだ。」

と、俺が説明すると嬉しそうな表情で、

遊馬「嘘、それはすごい!」

と話し合いながら席についた。

すると、まず、遊馬が話しかけた。

遊馬「不破の弓は本当にすごいよねー。前にどこかの大会で不破の競技を見てたけど、全部当たってたし！」

・
・
・

不破「しかし、今は何故か当たらないのだ…。」

!!いや、何故遊馬に心配かけさせるようなことをいう!と俺自身を責めていると遊馬は慌てたように次の話をする。

遊馬「不破って家族は何人ぐらいなんだ？」

不破「両親と祖父母、そして四人の姉…俺はとても幸せだが、姉たちからの扱われ方には本当に叶わん…。」

遊馬「そっそうなのか…。」

またもや遊馬を困らせたようだ。こんな俺には遊馬のそばにいる資格はない。けれど、せめて遊馬にこの気持ちを伝えたい。

そう決めた俺だが、そろそろ帰るべき時間であった。

そして、俺は、決心した。

遊馬「あつ、もうこんな時間…今日はありがとうな。俺はそろそろ…。」

不破「…待て！」

俺は強くも優しく遊馬の手を掴んだ。

俺の心がとても熱い。コレが行為を抱いているということなのか？

遊馬「どっとうしたの？」

不破「頼む、聞いてくれ!!俺は…。」

続く

空編

第一話

桜が舞う季節、新しい学校生活に胸が高鳴る新入生。新しいクラス替えに胸が高鳴る在校生。年に何人かが入れ替わっていく先生達。そんな出会いの季節に僕の人生が変わってしまった。

あの日交わした、幸せの事故。

僕は芹澤悠吏、二年生では、a組だったけれど、今年もa組だった。

その日は入学式で、新入生達はとても緊張した面持ちで臨んでいた。

まるで、入学仕立ての僕のようにだった。

入学式が終わり、僕は新しい教室へと戻った。

僕は自分の席に座りぼーっとしていると、超絶イケメンな男子が声をかけてきた。

「芹澤、疲れてるみたいだね。」

芹澤「たっ、鷹司氏!？」

彼は鷹司正臣、彼の事は入学してから知っていたが、同じクラスになって面識を持ったのがかなり最近。

僕には縁遠い存在だった。

芹澤「いいえ、この通りピンピンしておりますよ!」

鷹司「ふふふ……。」

僕は正直鷹司氏は苦手だ。なぜなら、僕の存在が馬鹿らしく見えるし、鷹司氏がとても眩し過ぎるから。

ただし苦手なだけで嫌いではないので仲良くしたいとは思っていない。

入学式後の生活单元が終わり、ホームルームが終わったあと、僕はジュースを買いに体育館前の自動販売機へと向かった。

芹澤「ふう、いよいよ三年生か……。僕、去年は後輩たちにも馬鹿にされたりしてたけど、今年はそうならないように気を付けないと……」

!…ん？」

僕はふと、弓道場を見渡すと矢が的に着くような音が聞こえた。そして、弓道場へと足を踏み入れた。

入口の所まで来ると、そこに凛々しく弓を射る男児の姿が目についた。

的を見渡すと、ほぼ全て真ん中に当たっていた。

芹澤「すごい…。」

僕がそうやって目を輝かせていたうちにその人はこちらに振り返った。

「あー、芹澤か?」

芹澤「不破氏?!こんな時まで稽古とはすごい、すごすぎる…。」

不破「そうか?近ごろあまり調子がでない。」

不破氏にも調子が悪くなる時があるのかと僕はおもった。

けれど、それは何故なのかは分からない。よくなることを祈る。

芹澤「まだやっていくのですか?」

不破「いや、もうこれで終わるつもりだ。」

と、不破氏が更衣室の方へ向かうと、不破氏がいきなり何かの拍子で転びそうになり、不意に僕はそれをカバーしていくがあえなく僕も一緒に床へと転んでしまった。

痛い。けど唇にはおかしな感触と気持ちよさを感じた。

なんだろうと目を開ける。

芹澤「不破氏…!!」

不破「芹澤…!!」

芹澤「…。／／」

僕の目の先には、不破氏のきれいな瞳があった。

それは驚いたように上下を広げていた。

不破「す、すまない!!」

芹澤「いっいえ…こちらこそ…!」

しばらくすると、不破氏は離れてくれたようだ。

僕も、不破氏も顔を赤らめていた。

不破「それじゃ、俺は着替えるから…また明日。」

芹澤 「まっ… また明日…。」

と不破氏と別れを告げたあと僕はすぐに自分の家へと早めのリズムを刻む。

この胸のリズムがどんどんと速くなっていく。

そう、その心が青春の架け橋。